

The Reminiscence of Exellia NG+1

地上の星々を繋ぐ者

作成レギュレーション

基本概要

- ・ 経験点：28000 点（新規）、29500 点（継続）
- ・ 資金：36000G（新規）、39000G（継続）
- ・ 名誉点：500 点
- ・ 成長回数：49 回

各種制限について

- ・ ヴァグランツ禁止
- ・ 蛮族 PC 禁止
- ・ ソード・ワールド 2.0 / 2.5 標準流派への入門、及び秘伝の習得・使用の禁止
- ・ 武器防具強化禁止
- ・ 《防具習熟 A / 盾》《防具習熟 S / 盾》の削除、及び装備可能ジョブの制限
- ・ レベル制限 5～6
- ・ 成長回数が 10 以上のときに、その成長回数の 60% 以上の偏重割り振り（極振り）禁止

導入 ～Out of Control～

赤方偏移を続ける光の先に、宙準星の竜が現れる。

エクセリア

『…辿り着いてみせたか。だが、十四座の権限は、すべて解放されている』

彼女の発言と同時に、地形が変化する。

それまでダジボス山嶺十合目だった場所が、正方形の大地に。背景もまた、美しさすら感じさせる山嶺に。

エクセリア

『スターダスト・シフルが蒐集した情報によれば、お前達すべてがイレギュラーだ。

よって、その例外の力を試させてもらう』

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

『…ああ。お前達の意志を、測らせてもらうぞ』

コズミック・キューサー・ドラゴン討伐戦

命の限り歩み、地上の星々を繋がんとした、親愛なる者の記録をここに。

お前が手繰れば、運命は集うだろう。喩え今は天地に隔たれ、心隔たれていようとも。

そこに嘗ての記憶がなくとも、人は歩いていく。その先が破滅だろうと関係なく。

——集いし絆の煌めきが、新たな未来を描き出すことを願って。

敵：コズミック・キューサー・ドラゴン

踏破時

君達はコズミック・キューサー・ドラゴンを退けてみせた。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「すぐ『死んだ』と考えるのは早計だぞ馬鹿者…」

そこへ、聞き慣れた声と共に、コズミック・キューサー・ドラゴンが消えゆくときに生じた光の中からエクセリアが現れる。

その姿は、いつものそれだったが…暴走時や敵対時に感じられた邪気は失せていた。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「…お前達のおかげで、私は増長しすぎた意志をそぎ落とすことができたよ。…この状態なら、使えなかった力も使うことができる」

そうエクセリアが言うと、空を見上げる。

エクセリア

「…祝福無き者が、一体どのような権能を有しているか、知っているかい？」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「私の場合は、『己の外側に新たな肉体を創り出して戦う力』、『完全な不老不死と自己蘇生』、『自死の必要なく次元を渡る力』、『稀なるつわものたちを喚び出す力』を持っているけど、もっと共通する力を、私達は宿している」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「——『穢れを受けての自己蘇生』。それが、私達が持つ力。

だから、喩え1回殴り勝ったとしても、いずれまた戦うことになる。

達観の域に達しているとされる私はその限りじゃないけれど、彼らは『祝福』を奪うために何度でも蘇る…」

(※GMメモ：RP待機)

死刑宣告

そこへ、駆けつける者がひとり。

顔が黒い靄に覆われ、しかし露出した肌から老いていることは予想できる者——第四座の『祝福無き者』である、黒の剣士だ。

黒の剣士

「…へえ。やっぱり倒したんだ。それと…裏切るつもりかい？エクセリアさん」

エクセリア

「裏切る？何を言っているんだ。

私は私の意志のままに動く。私に命令できるのは私だけだ。

この騒動を起こしている首魁、ジャック・ニコラス・トニトルスが何を思おうが、第十四の座は己の意のままに動き続ける。それが私の答えであると共に、私の意志だ。それは揺るがない」

黒の剣士はそれを聞くと、呆れた様子で君達を見る。

黒の剣士

「あくまで、混乱を止めたいだけ？これから起こるであろう混乱を？」

(※GMメモ：RP待機)

黒の剣士

「へえ。だったら、死刑だ」

そう言って、黒の剣士は闇に消える。

そしてすぐに、敵が降ってくるだろう。

嘗て、街の中で戦った者との再戦だ。

アンドレア

「見つけたぞ、最悪な戦士よ。今度こそ、貴様らから祝福を奪わせてもらおうぞ！」

敵：“幻影の魔星”アンドレア

君達はアンドレアを再び退けた。

しかし、アンドレアは不敵に笑う。

(※GMメモ：RP待機)

アンドレア

「気付かぬか！そうか気付かないか！ハハハ！滑稽だな貴様らは！

我らは龍姫公と契約し、《暗魂の暁》を滅する命を受諾したのだ！」

そういった瞬間に、ひとり、またひとりとアンドレアが増殖していく。

アンドレア

『我らは世界からあらゆる祝福を奪う者…あまねくすべての世界に終焉を齎し、我らの世界こそが最高であると証明する者。使命を放棄し、我らを阻まんとする十四座の者には裁きを、我らに立ち塞がる兵共には死を贈ろう。

我らは無窮にして無双。

我らは絶対なる不死、「祝福無き者」だ！』

エクセリア

「…お前、見失っているだろう。今この瞬間、この場に、『祝福を得た祝福無き者』がいるということを」

そう言って、エクセリアは左腕に炎を纏う。

エクセリア

「…不死鳥の力、使わせてもらおうぞ…！」

大きな光柱が生じると同時に、コズミック・キューサー・ドラゴンが再び現れる。

…否、コズミック・キューサー・ドラゴンとは少し外見が違う。

その翼が不死鳥のそれと化してただけに留まらず。

腰に武器をいくつも携え、左手には冷気を帯びた月の光の大剣を携えていた。

(※GMメモ：RP待機)

アンドレア

『な…リズン、だと…！？破壊と再生、それらを両立してみせたか…！』

エクセリア

『テメェら、まとめて消えろ…！』

アンドレア

『破壊の力で我らを焼き滅ぼすか…！ぐわああああ！！』

転生の炎、その後

破壊の炎がおさまり、景色もダジボス山嶺十合目に戻る頃。

顕現を解除し、半顕現状態に移行したエクセリアは、息を切らしていた。

君達はここで、レンジャー技能を用いた救助を行わなければならない。

救助（応急手当：レンジャー技巧）判定 目標値：15

成功するまで何度でも行える。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「ゲフッ、ゲフッ、ゴボァ…。ちっ…焼き切ってやろうと思ったが…ここまで体力を摩耗してしまうとは…」

彼女が咳とともに吐いた血を見て、そう呟く。

(※GMメモ：RP待機)

アルテマ

『…口ゴスに至ったか。肉の塊…いや、今の世界を生きる人が、我らと同等になっているのは知っている。だが、それらを代表するミュトスは、中々現れなかったのだ。

…よく耐えた。これだけは言わせてほしい…』

アルテマがそう言うのと同時に、足音が聞こえる。

龍姫公

「…倒したんだ。でも私には分かるよ。『超える力』を使ったこと」

(※GMメモ：選択肢の「何故分かった」または「バレちゃあ仕方ねえ」は、コズミック・クェーサー・ドラゴン討伐戦またはアンドレア戦にて合計で1回以上全滅した場合に出現)

PC への選択肢

- ・何を言っている？
- ・それを証明する方法があるのか？
- ・何故分かった
- ・バレちゃあ仕方ねえ

龍姫公

「『超える力』が発動する時…時空に大規模な歪みが生じる。

時間の流れが滅茶苦茶に飛んでは止まり、また動き出す。

そして、突然すべてが終わる。それができる奴は、唯一の例外を除いて、お前達『光の戦士』の仕業だった。

だから、その超える力を封じる法を出し、禁則とした」

(※GMメモ：RP待機)

龍姫公

「お前たちには分かるまい。ある日突然、何の前触れもなく、何もかもが初期化される。

それを知りながら生きる気持ちなど。私はそれを阻むために、この法を敷いた。

ただひとつ分かるのは…これが『宙準星の巫女の追想』で、この後何が起こるのかを知っている以上、もう何もせずに見ている訳には行かないってことだ」

エクセリア

「それを防ぐために悪法を敷き、超える力を持つ者を虐殺し続けたのか！」

憤ったエクセリアが大剣を振り上げようとするが、その瞬間に再び吐血する。

(※GMメモ：RP待機)

龍姫公

「…コズミック・キューサー・リズン。その力を使ったことで、お前はもう時間軸への干渉能を持っていない。自己蘇生はできるだろうが、時間軸を書き換えることはできない。

あと9年、無益な生を謳歌して、再びの破滅に向かえばいい」

エクセリア

「……………」

龍姫公

「うん？なんか言ったかい？」

エクセリア

「まだだ」

ドスを効かせて、吐血上等と言わんばかりに大剣を振り下ろす。それは過たず、龍姫公の右腕をもぎ取った。

龍姫公

「な…！？」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「人間ってというのはな、時に意地を張ってでも己の意志を突き通すんだよ。だから…、お前はもう戦えない。戦う目的が、それっぽっちしかない。お前の旅はここで終わる」

「幾度も繰り返し続けた 12000 年分の経験を…見せてやるよ」

その瞬間、大剣が失われ、代わりに双刀が腰に提げられる。更に、その刀、それぞれの刃渡りは 2m ぐらいありそうだった。

(※GM メモ：RP 待機

かつ、BGM：The Riddle (FINAL FANTASY XVI))

エクセリア

「お前達は下がっている。…ここからは本当の死合いだ」

この戦闘ではエクセリア・シャルロッテ・クレア・ゼーゲブレヒト・アウェアを使用します。予め、【巫覡の秘技】を読み込んでおくことを強く推奨します。

敵：龍姫公

龍姫公

「何故だ…！本調子ではないにも関わらず、何故そこまでの力が…！？」

エクセリア

「人の意志っていうのは、時折『限界』をぶち破ってしまう。私は、己の限界を、無理矢理にでもぶち破って乗り越えた…その結果が、今この瞬間に現れている」

(※GM メモ：RP 待機)

龍姫公

「…そうか。お前も…お前も『超える力』を…！」

エクセリア

「魔法文明からずっと生き続けたお前は、生まれながらの『<ruby>戦場の支配者<rt>ドミナント</ruby>』である代わりに、超える力を持っていなかった。だから、妬ましかったんだ。限界を打ち破り、視えぬ明日を切り拓く、光の戦士が」

(※GM メモ：RP 待機

かつ、BGM：Code 78E (ARMORED CORE VI FIRES OF RUBICON))

龍姫公

「…もはや問答は無用だ」

「全軍に通達。コード 78A を発令、ヴァルマーレへの戦術破壊魔法による爆炎攻撃を実行せよ」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「バーカ、忘れたのか？私が『祝福無き者』である、っていうことを」

第十四の座の印が描かれたクリスタルを掲げつつ、彼女はそう言った。

絶対防衛戦線

——同刻、ヴァルマーレ沿岸部。

上陸用の船と、古風な戦艦が迫り、沿岸防衛隊が上陸したフレイディアの兵士たちを押しとどめている中、唐突に、上陸部隊の背後にアゼムの術式が浮かび上がる。

そこから現れた『稀なるつわものたち』が、フレイディアの兵士たちを蹂躪していく。

ヴァルマーレ沿岸防衛隊兵士

「何だ、あの光に包まれた戦士たちは…？」

「少なくとも、俺達に敵意を向けてねえ。てことは…まさか味方か！？」

『稀なるつわものたち』とフレイディアの兵士たちが戦闘し…そしてフレイディアの兵士たちが蹂躪されていく。ヴァルマーレ沿岸防衛隊の兵士たちは、やや恐怖するも、3年前の、蘆田とエクセリアの契約を思い出す。

『龍姫公の独断により戦端が開かれたのならば、ヴァルマーレ側に、手段を問わずに加勢する』

彼女は、その契約を履行しているだけに過ぎないのだと。

終始

光り輝くアゼムのクリスタル。

それを見て、訝しんだ龍姫公は、各地に散らばらせた部隊と連絡を取る。

そこから聞こえてくるのは、無慈悲な断末魔ばかり。

龍姫公

「エクセリア…お前…ヴァルマーレに何をした…！？」

エクセリア

「お前の暴走を止めるための一手を打っただけに過ぎない。

白紙講和をするなら今のうちだぞ。これ以上、戦闘を続けるなら…私はこの旅路に終止符を打たなければならない」

(※GMメモ：RP待機)

龍姫公は、そのまま逃げ出した。

その後、かくん、と膝をつくエクセリア。

エクセリア

「…限界ギリギリだったんだ、こっちも。だけど、得られたものはあった。

『祝福無き者』の権能を、カルディアのマナという『祝福』を得た状態で操ること。

それが可能だと知れば、私も全力でいける。

…とはいえ、つかれた。5合目の温泉に行くのでしょうか…」

疲労困憊の様子エクセリアの誘いは、きっと有益なものになるだろう…。

古傷

無事に5合目まで降りてきた君達は、そこにある温泉施設に入った。

エクセリア

「えー…あのー…うん。その、なんだ。ここ、混浴ねえんだわ…。

君達は先に湯船に浸かっているくれ」

(GMメモ：RP待機、かつBGM「微笑む幽霊」)

ここからのイベントシーンでのロールプレイは、キャラクターが女性のプレイヤーのみが可能です。

君達が湯船で休養していると、そこへ金髪赤眼の女性が入ってくる。

一見すると、君達の知らない誰かが来たように思える。
身体中のあちこちがぼろぼろで、痛々しい傷痕があちこちにある。
しかし、その声は聞き覚えがあった。

エクセリア

「すまないね、こんなズタボロな外見で」

(※GMメモ：RP 待機)

エクセリア

「気になることはいくつもあるだろう。だけどまず聞かせて欲しい…。『傷だらけの私』を見て、君達はどう思った？」

PC への選択肢

- ・そこまで傷ついてまで戦う意味があるのか？
- ・さすが歴戦のエクセリアさんだぁ
- ・特になにも…

(※GMメモ：選択肢 3 番目はスキップ)

選択肢 1 分岐

選択肢 a：そこまで傷ついてまで～

エクセリア

「どのような存在にも、在る意味はあるだろう？だから、私にも戦う理由はあるんだ」

選択肢 b：さすが～

(※動画用メモ：BGM 音量低下)

エクセリア

「…あなた、後で『おはなし』しましょうか？」

(※GMメモ：RP 待機)

君達は、彼女が発した覇気に圧されるだろう。

選択肢 1 後

エクセリア

「あらゆる者に殺意や悪意といった負の意志を向けられながらも歩んできた。

時に味方だと思っていた者に背を刺され、時に絶対に倒さなければならない敵に胸を貫かれようとも…、私はそうして、終わりへと進む世界を歩き続けた。

だが…無数に並行世界を創り、その分岐の数だけ終焉が訪れていたことを考えると…、
今回は最後だなと、思ったんだ」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリアはそうっと左腕を見せる。

その左腕は、灰色に変色していた。

エクセリア

「この状態で、自由に動かせるのが奇跡なほどなんだ…。『これ』をどうにかする術はなかった。この世のどこにも、ね…」

女性キャラ限定で、唐突な見識判定。

見識（セージ知識）判定 目標値：17

成功した場合、その現象が「石化」であることに気付く。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「無理に、治療のためにリソースを割かなくていい。この石化は、メデューサなんかの呪いとは違う。エーテルが枯渇したことによる石化…言ってしまうと、ここには『モノの斯く在るべしを定めるもの』がない。それを外から補充することは、この世のどの魔法であったとしてもないんだ」

その言葉には、疲労や絶望といった感情が秘められていた。

PC への選択肢

・それでもめげずに戦っていたはずだ

・諦めるには早いのでは？

エクセリア

「…そうだな。まだ諦めずに戦っている。

この世界線が『最後の』世界線であることは、何度も繰り返しているうちに分かった。

この世界線を逃せば、私が関与できる世界線が消失して…無限に繰り返される『終焉』を見続ける羽目になる、とね。

…さて、私はもう少し湯船に浸かっていく。君達はもう上がるといい」

(※GMメモ：RP待機)

彼女に促され、君達は湯船から離れるだろう。

そして、エクセリアは左手を天に掲げる。

そのとき、ほんの数秒だけ炎が出たが、すぐに消滅した。

エクセリア

「…力を使えば使うほど、体は壊れ、心が悲鳴を上げていく。

見てるかジャック・ニコラス。お前達がどれほど『祝福』を求めようと、黒に染まった大地を浄化することはままならないんだ」

やがて艱難は心へと注ぐ

風呂から上がり、君達が情報を共有しているところへ、エクセリアが来る。

エクセリア

「明日には下山しよう。…君達も、準備をしておいてくれ」

(※GMメモ：RP待機)

君達は、コズミック・キューサー・ドラゴンを鎮めることに成功した。

そして、その先の姿を一瞥することにも成功した。

報酬

経験点

・基本：2500点

・ コズミック・キューサー・ドラゴン討伐戦／『超える力』なしでの攻略：2500 点

資金

・ 基本：3000G

・ コズミック・キューサー・ドラゴン討伐戦／『超える力』なしでの攻略：3000G

名誉点

・ 基本：300 点

・ コズミック・キューサー・ドラゴン討伐戦／『超える力』なしでの攻略：200 点

成長回数

・ 基本：15 回

アイテム報酬

・ 稀人の衣装備箱（シナリオ終了後にそれぞれのジョブに該当する「稀人の衣」を取得）

支配者たる者

翌日。

エクセリアは、半顕現状態でフレイディアの巫覡の間に訪れていた。

エクセリア

「来たぞ。私ひとりでな」

彼女がそう告げると、そこに龍姫公が現れる。

龍姫公

「ミュトスを超えロゴスに至った、とは聞いていたが…そこまで戦争を拒むのか」

エクセリア

「お前は、自分の弱さを知っていたんだろう。だからこそ、戦争特需で経済を回そうとしている。そして、お前は恐れた。『貴族の支配力』というものが及ばないこと…人が自我を持ったことに。

人が弱さを知ったら、今度は生き延びるために自分に抗うのではないかと…。

お前はただ逃げただけだ。世界からも、人からも…！」

龍姫公

「神の器ごときが、私を語るか…！クソツタレが！」

地形が急速に変化し、そこに途方もない闇を帯びた竜が現れる。

エクセリアは顕現をしようとするが、コズミック・キューサー・リズンはおろか、コズミック・キューサー・ドラゴンすら出てこない。

エクセリア

「…闇喰竜のドミナントだったな、そういえば。その権能で、顕現を封じたか…。

だが、私は…！」

外からでも分かる爆焰の後、ガバメント・クロッシングにて膝をつく龍姫公と、半顕現が解除され、刀を龍姫公に向け続けるエクセリア。

その周辺は騒然としていた。

エクセリア

「お前が消え、為政者という光が失われた時、龍刻は乱れる。

これから多くの、苦しみと悲しみが溢れるだろうさ」

龍姫公

「そう分かっている、立ち向かってきたのは何故？」

エクセリア

「それが人だ。その意味を分からずとも、生きたいと願っている。お前にとって、戦争のない世界は不完全かもしれない。だからこそ、誰かと繋がりを求め、間違いながらも歩いていく。目の前に広がる、この世界に…『答え』があると信じて。

ただまっすぐに歩き続けるんだ…。一步、また一步と」

それを聞いた龍姫公は、転げそうになりながらも大剣を投げつける。

それを弾いたエクセリアは、龍姫公の右胸に左手の大太刀を突き刺す。

エクセリア

「…じゃあな。

極めて近く、限りなく遠い世界に生きた…私の知らないエクセリア・エーディン」

そのまま龍姫公を袈裟斬りにし、簡単に死ねない彼女を屍目に、エクセリアは民に向けて言葉を発する。

エクセリア

「龍姫公エクセリアは、必要のない戦争を起こすことで経済を回そうとした。

私にも、彼女の意図はまるで分からない。だが…闘争の時代は、もう終わりだ」

———後の歴史書にも、『龍姫公をその玉座から引きずり下ろした』エクセリアのことは、こう記されている。

『漆黒の先を目指す者』と。